

子ども会育成会

年間の行事がかなり多いのが本会の特徴です。とりあえず7月中旬から9月末までの行事予定を挙げてみます。

- 市子連E地区大会 (7/15)、プール (7下旬)、ラジオ体操 (夏)、
- 田中野田夏まつり (8/4)、野外活動 (8/19)、9月子ども会例会 (8/25)、御南学区子ども会球技大会 (9/2)、御南学区運動会 (9/16)。

(田中 耕太郎)

《備考》○は町内会専門部、□は団体を示す。

この夏読書のすすめ

(7組) 猪子 啓二

この夏家族で読まれたら楽しいと思われる本を紹介します。大人も子供も「癒しの時代」と言われていますので、おもしろいと思います。

○ハリリー・ポッターと賢者の石 J.K.ローリング著 松岡佑子訳 児童よみもの (小中学生), 462p., ¥1,900, 静山社。

緑の眼に黒い髪、そして額に稲妻型の傷を持つ、魔法学校1年生の主人公が、邪悪な力との運命の対決に打ち勝つ、夢と冒険、友情の物語。

○金持ち父さん貧乏父さん ロバート・キヨサキ著 シャロン・レクター著 白根美保子訳 対象は一般, 280p., ¥1,600, 筑摩書房

大学に行って就職すれば一生食うに困らないなんて時代は終わった！金持ち父さんの六つの教を記した「教への書」と「実践の書」の2部構成で、お金持ちになる秘訣を説く。(人生訓)。

○チーズはどこへ消えた？ スペンサー・ジョンソン著 門田美鈴訳 対象は一般 (小説), 94p., ¥838, 扶桑社

迷路の中に住み、チーズを探す二人と二匹の物語。時代や状況の急激な変化にいかに対応すべきかといった、人生の様々な局面を象徴している。世界のトップ企業が研修テキストに採用している寓話。

《いずれもインターネットにて抜粋引用》

ラジオ体操へ参加を！

毎年父兄も子供達と一緒に、お互いの健康のために実施しており参加の皆様から喜ばれています。今年も下記のとおり実施しますので、一人でも多くの方が参加くださいますようご案内いたします。

場所 田中野田一号公園 (田中水門北側)

集合 午前6時25分

期日	7/23 (月)	24 (火)	25 (水)	26 (木)
	27 (金)	30 (月)	31 (火)	
	8/20 (月)	21 (火)	22 (水)	23 (木)
	24 (金)			

笹ヶ瀬川堤防周辺の一斉清掃

去る3月18日(日)、笹ヶ瀬川兩岸の町内会が合同で、堤防周辺の一斉清掃を行いました(写真)。このような催しは今回が初めてでした。ご承知のとおり、4月から粗大ゴミの収集が有料化され、それに伴い笹ヶ瀬川への不法投棄が懸念されましたので、予め一斉清掃を行ってきれいにしたわけです。全体の参加者は老若男女とでも多く、田中野田では回覧で参加をお願いしましたが、これまた驚くほど大勢の方々からご賛同をいただき、ありがとうございます。今はきれいですが、これから先が問題です。みんなで不法投棄に監視の目を光らせましょう。

今後も年に1、2回、このような催しがあるかと思しますので、その節は皆様のご協力よろしくお祈いします。



虫のはなし (6)

ミツバチは働き者か

(8組) 平尾 重太郎

昭和40年代の高度成長期だったろうか、外国人いわく、日本人は「ウサギ小屋に住む働きバチ(蜂)」と。現在では住(ウサギ小屋)のほうはかなり改善されたが、労働(働きバチ)のほうは、政府が奨励している週40時間労働(週休二日制)の実施は、現在全労働者の半分にも満たず、過労死やサービス残業の記事がまだ新聞紙上から消えていない。やはりいまでも日本人は働きバチである。このようにミツバチは働き者の代名詞のように言われているが、果たしてその働きぶりは？ ほんとにミツバチは勤勉家だろうか。

ミツバチはアリとともに、社会生活を営む昆虫として有名で、カーストといわれる分業生活をして、なかでも最も個体数の多い働きバチ(メスのみ、卵は産めない)が、ほとんどの労働(仕事)を受け持っている。彼女たちの仕事の種類は多く、成虫になってからの日数(成虫の寿命は

約40日間)によって、分担する仕事の種類が異なる。すなわち、巣箱内の仕事(内勤)としては、幼虫への給餌(子育て)、飛行練習、巣づくり、蜜の受け取り、巣室の掃除などで、これらは成虫になってから20日目頃までの若者が行う。これ以降熟令や老令になると巣箱外の仕事(外勤)に専従し、見張りや花粉・蜜の採集(訪花)などがある。

ある大学の先生の調査によると、巣箱内で働きバチ(青年)の仕事時間は、1日当たり平均6時間、最も多くて平均7.3時間であった。すなわち、巣箱内での働きバチの生活時間の大半は、休息と単なるブラブラ歩きに費やされ、人間さまの8時間には達しない。そして働きぶりに個性があって、勤勉な個体よりも、あまり働かない個体のほうが多い。

一方、巣箱の外勤ではどうであろうか。外勤は働きバチの壮令・熟令者が分担する採餌飛行は、巣箱から半径2kmの範囲内で行われる。日中の飛行回数は、花蜜が多い時期で1匹1日当たり平均13.5回、1回当たり35分間で、これは1日当たり7.6時間労働に相当する。花蜜の少ない時期では平均7回(1回当たり49分間)で、これを換算すれば5.7時間となる。やはりどの場合も8時間に満たない。

こうみてくると、一見働き者とされているミツバチは、意外に勤勉ではなく、それにしても外勤担当の年寄よりも、内勤の若者のほうが勤勉度が低いのはどうしたことか。もっとも人間さまの8時間はあくまで拘束で、8時間びっしり仕事をしているわけではないのだが。しかし、ミツバチの働きぶりは、甘くみて人間さまとほぼ同じ程度といえようか。少なくとも模範的な勤勉家とはいえないようである。

それでは訪花数はどうであろうか。採蜜の場合は1日に平均250花(1分間に7.1花)、花粉採集では30花(2花/分)という例がある。わたし達はこの例のように、ミツバチが花から花へと訪れている光景をしばしば目にする。このようなセカセカした働きぶりが、一見ミツバチは働き者のように思わせているのではなからうか。

一方、オス(平均寿命は約40日)の働きぶりはどうか。女王は都合よくオスとメスを産みわけ、オスは未受精卵から、メス(働きバチ)は受精卵から生まれ、オスの数はメスに比べ圧倒的に少ない。オスは巣箱内の片隅にこもって、餌(蜜)は働きバチから口移しにもらい、時々脚で身づくろいをする以外、1日中何もせずただ静止しているだけの、ぐうたら亭主であるが、男性としてこんなオスバチは羨ましい。

このようにオスは一見閑人のようなのだが、同志との激しい競争にうち勝ち、女王との交尾・授精という、一世一代の大仕事を狙っているのである。ちなみに、交尾は空中で2、3日間に数回行われる。まず、性熟した女王が空へ向けて飛び立つと、それを待っていたかのように、オス達も一斉に女王の後を追いかけて、空中での飛しょう交尾となる。

ところが、運よく女王さまと仲よしになれるのは、ほんの数匹だけで、交尾に成功したオスは力尽きたのか満足きったのか、再び巣箱へ帰ることなくその日のうちに果てる。一方、競争に負けて仕事ができなかった多くの者は、ただひたすら老衰の一途をたどる。やがて餌ももらえなくなり、弱ってくるとメスバチによって巣箱の外へ引きずり出される。羨ましいどころか衰れて、この残酷物語には男性として同情したくなる。